

---

ヴァンパイアハンター日誌

新人ハンターとヴァンパイア

金城 ユウ

---

## 注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

### 【小説名】

ヴァンパイアハンター日誌          新人ハンターとヴァンパイア

### 【Nコード】

N4287C

### 【作者名】

金城 ヌウ

### 【あらすじ】

新人ヴァンパイアハンターの葉月秋穂はつきあきほは、自称ヴァンパイアのレイブラッドと出会う。この出会いは秋穂にどんな運命をもたらすのか？

## プロローグ

神暦2999年3月。

私は、ヴァンパイアハンターの資格を得た。

空想の世界の住人と思われていた、モンスターや妖怪が人の前に姿を現した事件、「深紅のクリスマス」から300年近く過ぎた。

始めは無力だった人間も、次第に対抗手段を身につけていく。

そして、神暦62年。民間初の対モンスター会社が設立された。

その仕事に従事する人々を、モンスターハンターと呼ぶようになり、年々、細分化、専門化された。

そのハンター達の中でも、ヴァンパイアハンターは最高峰に位置する。すべてのモンスターに対応する知識と技量を持ち、破格の報酬を得る。まさにエリートだ。

そのヴァンパイアハンターの免許を、私は18歳1ヶ月という免許制度が制定されてからの最年少記録と共に得た。明日から、いや、たつた今からヴァンパイアハンターを名乗れるのだ。

私はうれしさのあまり、この先に訪れる数奇な運命を、まだ知らなかった。

## プロローグ（後書き）

これから始まります「ヴァンパイアハンター日誌」をよろしく願  
いします。

シリーズモノで4作予定していますが、気分しだいで増えるかも（  
笑）

## 逃走

ビルとビルの間裏路地を、私は逃げていた。

ごみ箱を倒し、服が汚れるのもかまわず走る。「こんなはずじゃなかったのに」という思いが心を占める。

そう、こんなはずではなかったのだ。

私の初仕事は、ベテランハンターと組んでのワーウルフの駆除だった。アルバイトでハンター助手をしていた時に、何度か経験したこともあり、楽勝な仕事だった。ヴァンパイアが現れるまでは……

私は、愛用のCZ-75で、ワーウルフの頭部に銀の弾丸を打ち込んだ。とたんに、ワーウルフの動きが止まる。

銀製の武器、弾薬はハンターの標準装備だ。驚異的な回復力を持つモンスターも、銀によりつけられた傷は回復出来ない。詳しい理由はまだ解明されていないが、あらゆるモンスターに、銀が有効だということは実戦で証明済みだ。

銀の弾丸は高価で、無駄遣いはしたくないのだが、安全には代えられない。慎重に心臓を狙い、さらに2発打ち込んだ。

「よし、よくやった」

今回、組んだハンターが、笑いながら近づいてくる。

「サポート、ありがとうございます」

私は頭を下げた。新人の場合、2、3回はベテランのサポートを受けて仕事をする。ハンターの免許を発行するハンター協会の規約にもあり、サポートをしたハンターが保証人となった営業許可書を貰わなければ、自由に仕事を受けることも出来ない。

つまり仕事の内容で、先輩ハンターの信頼を勝ち取らなければならぬ。

「それじゃ、夕食でも食べて帰るか」

そう言っただけで笑ったハンターの頭が、突然爆ぜた。まるで、出来の悪い映画を見ているようだ。

「我が狩場を荒らす愚か者どもが！」

黒い服の上に、黒いマントをした男が、2 m程の高さに浮いていた。そして、瞳が紅く光る。

「ヴァンパイア……」

ヴァンパイアの瞳を見てしまった私は、蛇に睨まれた蛙のように身動きが出来ない。頭の中で、逃げると警鐘を鳴らすのが、体がいうことを聞かない。

薄ら笑いを浮かべたヴァンパイアが、少しずつ近づいてくる。ヴァンパイアの手が、あと数センチで私に届くという時に、携帯電話が鳴った。同時に金縛りが解ける。体の自由を得た私は、ヴァンパイアを突き飛ばし、走り出した。

考えがあつたわけではなく、ただ本能に従って逃走したのだ。

## 逃走（後書き）

主人公いきなりピンチです。

さて、逃げ切ることが出来るでしょうか。

以降、物語の補完です。

2種類の免許が出てきます。

ひとつめは、ヴァンパイアハンターの免許。

ふたつめは、営業許可書。

ヴァンパイアハンターの免許はハンターの証しであるが、これだけで自由に仕事を請けることは出来ません。

ハンター協会の斡旋か、ハンター会社に所属しないと仕事にありつけないのです。

営業許可書を取得後は、自由に仕事を請けることが可能になります。

取得条件はハンターもしくはハンター会社の2名以上の保証人の推薦が必要。

ただし、保障人はハンター協会が指名することになっています。

## 少年

路地を右に曲がった。100m程走ると3mほどの高さの壁が行く手を遮る。壁に背中をつけて振り返ると、ゆっくりとヴァンパイアが近づいてくるのが見えた。

「い…嫌…こないで……」

右手に持ったCZ-75を乱射する。数回の轟音の後、スライドが後退したまま止まる。だが、ヴァンパイアは平然と立っていた。

「全部…外れた……」

「もう終わりか？ならば、いただごうか」

「ひい」

恐怖のあまり、悲鳴もまともにあげることが出来ない。ヴァンパイアが私の肩を掴んだ。

「ん、この匂い。処女か。はっは、今宵はついている、昨今、処女は少なくてな。不味い血ばかりで、飽き飽きしていた所だ」

もう抵抗する気力も無かった。いやらしく歪んだヴァンパイアの顔が、私の首筋に近づく。私は目を閉じた。

ぐしゃ！がしゃん！がらがら……

にぶい、何かを殴ったような音と、スチール製のゴミ箱をひっくり返したような音が、突然響いた。

ゆっくりと目を開くと、目の前にヴァンパイアの顔はなかった。

代わりにまだ少年と言って良い大きさの背中があった。そして、少年が見据える先のゴミの山からは、2本の脚が生えていた。

「女性を口説くのに、力ずくと言うのは、感心しないな」

何処まで本気なのか、少年がこの場に合わない軽口をたたく。

「ねえ、お姉さん。こいつ、僕が倒したらデートしようよ」

振り返って、そう言った少年は、テレビでよく見るアイドルグループが、束になってもかなわないほどの美形だった。年の頃14、5。思わず首を縦に振ったが、あわてて首を左右に振り言い直す。

「なに言っているの。相手はヴァンパイアよ。早く逃げて！」  
「違うな。逃げるのは奴の方さ。僕の方が強い」  
少年は、私に向かい不敵な笑みを浮かべ言い切った。  
「一体どこから、そのような自信が湧くのだろうか？だが少年は、その自信を實力で証明することになる。」

## 少年（後書き）

謎の美少年登場です（笑）

少年の正体は次回ですが（笑）

物語補足

CZ-75 FIRST-MODEL：秋穂の愛銃。

チエコのCZ（チエスカ　ズプロジユヴカ＝チエコ銃器工業）製造のハンドガン。

1975年-1980年製造で「ショートレイル」という呼称でも知られている。

当時の西ヨーロッパの銃器専門誌はこぞって「優秀」の折り紙を付け、一般の愛好家も高得点の評価を与えていた。

西側各国の警察、軍関係者もこの優秀なCZ-75に目を付け、制式拳銃のライアルのリストに入った程だが共産圏の銃という事でライアルを見送られるという運命でもあった。

その為か入手が困難となり、プレミアが付く人気の高さで愛好家が絶対に手放さない為、1984年の規制緩和まで形状を似せたコピー製品を数多く生んだ。だが、どのコピー品も粗悪な為にオリジナルを超える物は登場できなかった。

## ヴァンパイア？

ゴミを押しつけて、ヴァンパイアが立ち上がる。

「小僧！何のつもりだ。我を高貴なるヴァンパイアと知ってのことか」

「高貴だと、下衆な下僕風情げほくが！お前の主人は誰だ？この辺りだとアルセクトか」

少年の口調が変わる。

「な、何故それを……」

「アルセクトに伝える。あまり五月蠅いと、狩るぞ。とな」

「人間風情が、我が主人を……こ、金色の瞳」

ヴァンパイアが、いきなりおびえた表情を浮かべる。

「ま、まさか、げ、げん」

少年の右手が動いたかと思うと、ヴァンパイアの心臓部に銀色のナイフが突き刺さり、ヴァンパイアは、悲鳴をあげる間もなく灰となって崩れた。

「口は災いの元、覚えておきな。と言っても聞こえないか。さて、邪魔者もいなくなったし、おねえさんデートしよう」

「ちよつと待って、あなた何者なの？ヴァンパイアをあつさり倒しちゃうし、それにあなたの瞳は黒いのに金色だとか、最後に言いかけた、「げん」って何？それから、それから、アルセクトって誰？」

私は、混乱した頭のまま、少年を一気にまくし立てる。

「えー、聞きたいの？それじゃ、そこで食事でもとりながら、というのはどう？」

少年が、にこにここと聞き返した。私は、黙って少年を睨む。

「わかった、わかった。まずは自己紹介。僕の名前はレイ。レイ」

ブラット、年齢不詳。職業、ヴァンパイア。以上、おねえさんは？」

「え、葉月秋穂」

「秋穂さんか。いい名前だね。純血の日本人？」

今の時代、日本人も混血が進んで、純血の日本人というのは少ない。外国人の血が入っていても、名前は純和風というのはい多いけど。「ええ、今時めずらしいことにね。って、ちよつと、なによ。職業ヴァンパイアって」

「気が付いたか、そのままの意味だけど……」

「ヴァンパイアですって？いい？ヴァンパイアの特徴というのは、赤い瞳をしていて、コウモリや、オオカミに変身して、日の光や銀の武器を使わないと倒せないの。あなた該当する？」

私は、ヴァンパイアの一般的な特徴をあげる。ヴァンパイアは人間だった時の記憶、性格を引きずるから、服装等はさまざまだが、赤い瞳等は共通する特徴だ。

「まあ、それは置いておいて。続きは、ベッドの中で言うこと……」

ベッドの中って、いつの間にそこまで話しが進んだの？

しばらく、無言で見つめ合う（あくまでも、私は睨んでいるつもりだ）。が、遠くの方からパトカーのサイレンの音が近づいてきた。おそらく、私と組んでいたハンターの助手が通報してくれたのだろう。となれば、警官だけでなく他のヴァンパイアハンターも駆けつけてくるはずだ。

「うーん、面倒は嫌い、なんだよね。残念だけど」

レイと名乗った少年は、そうつぶやくと、ひょいと3mはある壁のうえに飛び乗る。普通の人間には、助走無しで3mの高さの壁の上に飛び乗ることなど不可能なのだが、彼は楽々とやってのけた。驚くべき身体能力だ。

「ちよつ、ちよつと待ってよ」

「面倒事は嫌いなんだ。ヴァンパイアは、秋穂さんが倒したことにしておいてよ。じゃあ、またね」

そう言い残して、彼は壁の向こう側に消える。

「いったい、なんなのよ！」

私の叫びだけが、夜の街に木霊こだました。

**ヴァンパイア？（後書き）**

計ったようなタイミングで登場した少年（笑）

自称、ヴァンパイアですが、真偽のほどは？

すぐにわかるんですけどね。

今回は物語の補完は無し。

この作品におけるヴァンパイアの定義は、作中で行わせていただきます。

## 自己嫌悪

「ふう」

私は、行きつけの喫茶店でため息をついた。その後、警察に拘束され、朝まで取調べを受けたのだ。自分でも、よく訳の分からない事件の顛末を説明し、その責め苦から解放された時には、朝の通勤ラッシュも一段落していた。

ハンター協会から派遣された弁護士の談によれば、一時、殺人の容疑もかかっていたらしい（容疑自体は、今回組んだハンターの助手が記録した映像で晴れた）。私は、もう一度大きなため息をついた。

「秋穂ちゃん。どうしたの？」

マスターが声を掛けてくる。マスターの本名は、石原昭二いしはらの しょうじさん、今年で47歳になる口髭がダンディーなおじさまである。脱サラして3年前に、この『リーフ』という喫茶店を始めた。そのお客さん第1号が、当時女子高校生をしていた私だ。それ以来、毎日のように通い詰めている。

マスターは、私の目の前に、オリジナルブレンドのコーヒーとシナモントーストを置く。

「マスター、トーストは頼んでないよ」

「サービス。それとも、いらない？」

笑ってそう言うマスターに、私は即答する

「いただきます！」

マスター手作りのパンを使用したシナモントーストは、この店の代名詞みたいなもので、非常に人気がある。これを食べる為に、朝早く通ってくる常連さんもいるくらいだ。

いつもは、これを食すると「しあわせ」となるのだが、今日は気分が乗らない。理由は……昨夜の自分への自己嫌悪だ。

ヴァンパイアから逃げたこと自体は、間違っていないと思う。不

意打ちされ、こちらが圧倒的に不利だったのだ……

問題は、その逃げ方だ。素人のように恐怖に支配され、闇雲に走り回り、あまつさえ逃げ場を無くし追い詰められた。右手にはヴァンパイアに対し有効な武器を持ち、ポケットには予備のマガジンもあつたにもかかわらず。である。

本当に、穴があつたら入りたい。それどころか、穴を掘ってでも入りたい気分だ。

「はぁー」

私は、ここに来て、何回目かのため息をついた。

自己嫌悪（後書き）

昨夜の醜態に落ち込み気味の秋穂でした。

やればできる子なので（笑）、すぐに復活しますけど。

シナモントーストは、私が好きなだけです（笑）

なんだか食べたくなってきたな。丁度お昼だし作るかな。

## 再会

そんな私を見かねてか、マスターが声を掛けてきた。

「秋穂ちゃん。そんなに落ち込んでもしようがないよ。今は、命があつたことを喜ぶべきだよ」

「えっ、何で知っているのよ、マスター」

私は、昨日のことを何も話していない。もしかして、エスパー？などと訳がわからないことを考えている私に向かい、マスターが無言でテレビを指差す。テレビでは昨日の事件が放送されていた。

ちょうど、ワイドショーのネタが無い時にぶつかつたらしい。普段ならこの手の事柄が放送されることはあまり無い。モンスターやヴァンパイアの犠牲者など毎日のように出ているのだ。それはもう、交通事故なみに。

テレビの中では、コメンテーターが好きかって言っている。

私にとっての救いは、理由はわからないが私の顔写真や本名が公表されていないことだ。

ハンター同士なら他のハンターのスケジュールぐらい簡単に調べることが出来るのだが……

結局、ヴァンパイアは殺されたハンターと組んでいた、新人ハンターのAさん（18）に退治されたことになっている。

「秋穂ちゃんの様子からすると、報道の通りじゃないのさ。秋保ちゃんの手柄なら、もっと景気良さそうな顔をしてもいいはずだな」

「マスターには、かなわないわね」

私は、昨日の出来事をぼつり、ぼつりと放し始めた。

話し終わると、マスターは黙ったままコーヒーのお代わりを注いでくれた。私も、何かを言ってもらうために話したわけではないので、気にも留めずにコーヒーに手をつける。

心なしか、マスターに話した事で心が軽くなった気がした。

カラン、と軽い音がして、入口から二十代後半の女性が入ってきた。腰まである黒い髪の毛と白く透き通るような肌、胸の二つのふくらみ、そして、女性の私から見ても文句のつけようが無い美人だ……う、うらやましい……見るたびに敗北感に苛まれるのは、気のせいではないはずだ。

「秋ちゃん、来ていたのね。今、事務所に帰らない方がいいわよ。マスコミがたくさんいるから」

この女性も顔見知りである。名前は、篠原秋保さんしのはらあきほ。いや、今は石原秋保さんいしはらあきほだ。私と同名の素敵なお姉さんである。去年の秋に、マスターと結婚したのだ。

元々は、ここの常連さんだが、去年の夏の初めに「私、マスターと結婚します」と爆弾発言をし、私を含めた常連連中を驚かせ、いつも冷静なマスターをあたふたさせた。

このとき、マスターもプロポーズの返事をまだ聞いておらず、「まさか、みんなの前で返事をもらうとは……」と苦笑していたのを覚えている。

「秋保さん、本当ですか？今から報告書も作らないといけないのに……」

「ここで、作ればいいわよ」

秋保さんは、そう言って微笑んでくれた。

「それじゃ、言葉に甘えて店の隅、お借りします」

秋保さんに言っつて、モバイルパソコンを広げる。巷ちまたでは音声入力ちまたが主流なのだが、私は昔ながらのキーボード入力を使っている。

なぜなら、音声入力は側から見てみると、ぶつぶつと、ひとり言を言っているようで怖いからである。ファーストフード店や、喫茶店のホームで、ぶつぶつと呟く様は、不気味以外の何者でもない。

さて、やるぞ！と服の袖を捲り上げた時、カランと音がした。思わず入り口を見た私は、指を指して、「あっ！」と声をあげた。昨夜の少年が、そこに立っていたからである。

再会（後書き）

前回の続きですが、話が進んでないですね、これ（汗）

次回からは、解説が多くなると思います。この話を含めて本編3部構成、番外3部構成を考えているのですが、どの話でも前提になるモノの説明です。

## ヴァンパイア

自称、ヴァンパイアの少年は、私の横でガーリックトーストをかじっていたりする。頬に私の手形がくつきり付いているのは、いきなり抱きついてきた罰である。彼は、コーヒーを飲み干すと、マスターにおかわりを要求した。

ちなみに、ヴァンパイアがニンニクを苦手としているという説は、効果の有る無しが激しい。個体差があるらしく食物アレルギーのよくなものなのかもしれない。

こうして考えると、人間ってヴァンパイアのことをどれほど知っているのだろうか？

「それで、無敵のヴァンパイア様が、何故、昼間からフラフラしているのかしら？」

いささか、険を含んだ声で少年に尋ねる。

「ただで、情報を得られると考えるのが、この国の人間の悪い癖だから、デートしてくれたら、教えて……」

私のほうを見た少年（確かレイと言ったわね）は、私の顔を見たとたんに口をつぐんだ。

何よ、失礼ね。

すると、カウンターの奥から、私を見た秋保さんが、

「秋ちゃん、秋ちゃん。そんな怖い顔したら、可愛い顔が台無しよ」  
「どうやら、感情がそのまま顔に出たようだ……」

私は、心を落ち着ける為に深呼吸をした。

「OK、夕食くらいなら、付き合っわよ」

私は、わざとらしくため息をつきながら答えた。

「まあ、そんなところか……」ところで、ヴァンパイアについて、どれくらい知っている？」

「いいか、ヴァンパイアというのは3つに分けることができる」  
「え、2つじゃなくて」

私は聞き返した。ハンター協会は、ヴァンパイアを2種類に分けている。

「その辺は、順番にな。まずは、下僕げぼくと呼ばれるヤツ。昨日出くわしたヤツだ」

私はコクコクと首を縦に振る。

「こいつらは、主人しゅじんと呼ばれる、ヴァンパイアの上級種に吸血されることによつて吸血鬼化する。身体能力は主人クラスと変わらないが、変身能力や、増殖……つまり、他者をヴァンパイアに変える能力はない。こいつに吸血され殺された者はゾンビと化す」

少年は私の方をチラツと見た。なに？ちゃんと聞いているわよ。

それに、言いたいこともわかつている。彼が助けてくれなければ、私はゾンビになって街を徘徊していたかもしれないのだ。

「弱点は、心臓部や脳の銀の武器による破壊。通常の武器に頼る場合は、脳を一気に70%以上破壊すること。それで、二度と復活することは無い。昨夜のヤツは、銀の武器で心臓部を破壊した。完全に葬ったことになる。そして、日の光を浴びると消滅して、やはり復活できない」

それは、私も知っている。ハンター協会の講習で何度もやったし、ヴァンパイアハンターの相手は、9割方、下僕といわれるヤツだ。

「次は、主人だが、こいつらが主に、ヴァンパイアを増やしているヤツ等だ。特徴として下僕と呼ばれるヴァンパイアを支配する能力。コウモリやオオカミ、霧等に化ける変身能力に増殖能力」

少年は、ここで話を一端切つて、コーヒーを飲む。

「吸血には2種類あつて、エネルギー補給の為の吸血。これは、被害者を殺すわけではなく血を吸うだけだ。牙の跡もすぐに消える。

そして、下僕を生み出す為の吸血。これは、牙から特殊なウイルス（ヴァンパイアウイルスというそうだ）を被害者の体内に注入する。

そして、そのウィルスが24時間で被害者をヴァンパイアに変える。ここまででは、いいか？」

講習でやったのと同じだ。補足すると、主人クラスになれば心臓や脳を、銀の武器で破壊された後に残る灰をそのままにしていると復活するのだ。

今では、主人クラスを相手にした時は、灰を集め水に溶かし封印するのが一般的だ。水に溶かすと、何故か復活しないの。

銀製の武器以外で、心臓や脳を破壊した時はというと、たとえば、昔から伝わっている、木の杭を心臓に打ち込む場合などは、一時的に行動不能にすることはできるが、消滅させたりできるわけではない。日の光も同様だ。あくまで、木の杭が刺さっている間だけ、灰になっっている間だけ無力化できる、一時しのぎでしかない。

そのことが、あまり知れていなかった時代は、吸血鬼は本当に不死だと信じられていた。

私が、これらを補足すると少年は……（いいかげん、名前でも呼んであげてもよいかな。）

レイは、うんうんと頷いた。

「さてここで、問題。元々この世に存在しないはずの、主人クラスのヴァンパイアは、何処から来たのだろうか？」

## ヴァンパイア（後書き）

今回は解説で長くなってしまっただけで申し訳ない。

説明のシーンは難しいですね。セリフが中心になっちゃうし、かといってセリフだけを並べるわけにもいかないし。バランスどうでしょうか……

ちなみにヴァンパイアの特徴ですが、「吸血鬼のお仕事 鈴木鈴ノ著」の影響を大きく受けていて、あと「ストリート・ジャケツト 榭一郎ノ著」の影響（ヴァンパイアが出てくる小説ではありませんが）を少し受けています。

ちなみに吸血鬼と言えばこの漫画「ヘルシングHELLSING 平野耕太ノ作」の影響はほとんど受けてません（笑）

出したかったんですけどね、アーカードみたいなヴァンパイアではなくて、アンデルセン神父みたいなハンター（そっちかいノ笑）癖がありすぎて（笑）

## 原種

「……」  
考えたことも無かった。300年前に他のモンスター達と共に現れた？いや、確かにそういう個体もいるだろうが、ハンター協会の書庫には、神暦135年に生まれ、20歳の時にヴァンパイアになったという日記を残している主人クラスのヴァンパイアもいる。

「主人クラスのヴァンパイアでは、下僕クラスのヴァンパイアを生み出すのが精一杯だ。同クラスのヴァンパイアは、生み出せない」

レイの言葉に、導かれるようにして、私は答えにたどり着く。

「主人クラスのヴァンパイアを、生み出せるヤツがいる……」

「そう、正解。それが人間たちに知られることなく、ヴァンパイア達が原種げんしゆと呼ぶ者……僕もその一人だ」

そう言つて、どこか遠くを見るような目をした、レイの横顔に見とれてしまう私。(レイつて、黙っていると絵になる)ハッと、我に帰るとマスターと秋保さんの冷たい視線が……

いいじゃない。だって美形なんだもの。

「その原種というのは、ヴァンパイアではないの？」

気を取り直して、質問することにする。

「吸血鬼、ヴァンパイアさ。一般の食物では、エネルギーを補給できないしね。血液と一緒に精気を吸収しなければ存在できない。やり方によっては、血を吸う必要は無いけどね。それを専門にしているヤツは、吸精鬼とか呼ぶな」

レイが、意味深に笑う。その意味を理解した私は顔が赤くなる。

私は、話題を変える為に次の質問をした。

「原種は、他のヴァンパイアと何処が違うの？」

「そうだな。昼間は普通の人間と変わらないよ。致命傷を受ければ死ぬし、腕力や身体能力も平均より高いくらいだ。日光は平気。主人や下僕のヴァンパイアと違って何故、平気なのかは解らないけど

ね。で、夜になるとヴァンパイアの能力が使えるようになる。吸血自体は昼間でも出来るけど、増殖する為には夜でないと……厳密に言うと他にも条件はあるけどね。あと、主人みたいに、他のヴァンパイアを支配することは出来ない。その代わり、身体能力は主人クラスを凌駕するから、一対一なら、まず負けない。他には？」

私は少し考えて、一番、気になることを聞くことにした。

「あなたは何者？生まれた時からヴァンパイアだったの？」

原種（後書き）

今回も、説明が続きます。  
おそらく次回で解説は終わりだと思います。たぶん（笑）

レイ

「神暦31年には、まだ人間だったよ。交通事故にあってね。相手は飲酒運転ひどいものさ」

レイが、私を見た。ん。何かな？

「気を失う前に、右手がちぎれていたのを覚えている。けれど、病院で気が付いたら元通り。それどころか傷一つ無い。代わりに耐えがたいほどの喉の渴きがあった。その本能のままに、看護師を襲い血を啜った。すると、ヴァンパイアとしての知識を思い出した。思い出したというのはおかしいが、そんな感じだった」

レイが、また私のほうを見る。私の表情を窺うように……

私はどのような表情をしていたのだろうか？自分でもよくわからないが、少なくとも恐怖ではなかった。

レイは、手の中で弄んでいるコーヒークップに視線を落とすと話を続けた。

「その知識の中に、ヴァンパイアのこともあったよ。人間の体内にもともとヴァンパイアウイルスというものがあるんだ。不活性化なウイルスが、何かの拍子に活性化すると人間は、原種と呼ばれるヴァンパイアになる。確率としては何十億万分の一ぐらいの確立だけだね。僕も原種のヴァンパイアは2人しか知らない。皆、人間にまぎれて生活しているから。だけど、主人クラスのヴァンパイアを増やしているヤツもいることは確かだ」

レイは、ぬるくなったコーヒーを飲み干した。

「あなたは、なにをしたいの？」

「目的は無い。歳を取らないせいで、一箇所に定住するのも難しいから、日本中旅をしている」

レイは、少し寂しそうな顔をして言った。

「それじゃ、アルセクトって誰？」

「主人クラスのヴァンパイア。この辺の下僕を仕切っているのはヤ

ツだよ。他のヤツや、ハンターに狩られた話は聞かないから、健在だと思っ」

「他のヤツ？」

「ああ、やくざと同じで縄張り争いつてやつ。自分と下僕の食い扶持は稼がないと干からびてしまっ。昨日のヤツも狩場とか言っていただろ。人の集まる所が好都合だな。殺すわけではないからね」

「え、そうなの？」

カウンターのの中から秋保さんが言った。

「ヴァンパイアの特珠技能、魅了チャームを使ったりして、記憶操作くらいはするけどね。人を殺すとハンターが大挙してやって来る」

「ヴァンパイアも生活大変なのね」

秋保さん……ヴァンパイアに同情してどうするのよ。しかし、ヴァンパイア同士なら仕方ないけど。もし、ヴァンパイアとやくざが縄張り争いしていたらデーブよね。

「という訳で、ヴァンパイアのしるぎも楽じゃないから、主人クラスでも下僕を持たないヤツもいる。僕みたいに、日本中フラフラしているのも珍しいけどな」

そう言いながら、レイがコーヒーのおかわりを注文している。気に入ったのかな？

「ところで、レイさん」

「レイでいいよ」

「それじゃ、レイ。行く所はあるの？」

レイ（後書き）

終わったー。

今回で説明のシーンは終わりです。

やっと物語が進む。

## 事務所にて

「レイ、起きてる？」

私は、クーラー・ボックスを事務所の机の上に置いた。

この事務所は、両親を亡くした私の後継人であり、学生時代にアルバイトしていたハンター事務所の所長が、ハンター試験を合格した私に格安で貸してくれた物件だ。

しばらくすると、奥の仮眠室からゴソゴソと音がする。起きたよ  
うだ。

レイが、私の事務所に住み込むようになって1週間が過ぎた。表向きは助手ということになっている。もちろん、ヴァンパイアということは、秘密だ。

ふと、机の上を見ると、ハンター協会からの手紙が置いてある。ハンター協会では、何故かEメールではなく手紙を使う。新聞や書籍が電子化された（注文すれば、紙の本も、まだ手に入る）現代も変わらない。

手紙の内容は、次の実地が決まった為の召喚状だ。  
ええつと、本日15:00時に、ハンター協会に出頭すること。

この仕事をこなし保証人がそろえば、正式な営業許可書が貰える。嬉しさのあまり、しばらくあっちの世界にいつていた私に、レイが冷たい視線を向けていた。

「な、な、なによ？」

「いや、秋穂ちゃんを見ていると、あきないなあと思って……あ、おはよう」

「おはよう。って、もうお昼を回っているわよ」

「早起きのヴァンパイアっていうのも変だよな」

レイが笑った。

ずるい。私はその笑顔を向けられると、何もいえなくなってしまうんだ。美形というやつは得である。

「それじゃ、そのヤツ冷蔵庫に入れておいて」と、クーラーボックスを指さした。

「また、輸血パックか……」

「ハンターの私が、人を襲ってもいい。なんて言えないでしょう。それを手に入れるのも大変なのよ」

「秋穂ちゃんが、血をくれたら1ヶ月に1度でいいのに……」

「怖いから嫌!」

「それじゃ」

「ダメ!」

レイが、次の言葉を紡ぐ前に拒否した。言いたいことはわかっているのだ。最後まで聞く必要はない。

「まだ、何も言っていないのに……」

「いいのよ。言いたいことはわかっているから。とにかく、それで我慢しなさい」

レイが、ぶつぶつ言いながら、パックを冷蔵庫に移す。

「そういえば、手紙がきていたぞ。紙のやつ」

「次の実地が決まったのよ。この仕事で認められれば、営業許可が貰えるの。早い話が、ハンター協会が斡旋する仕事以外でも、自由に請け負える。前回のワーウルフの仕事でも50万クレジットの収入になったし、ヴァンパイアの分で100万。合計で150万クレジットの報酬になっているわ。協会の斡旋だから安いけど、民間の相場だと5割増しになるわ」

「儲かるな。ハンターってやつは……」

ヴァンパイアのレイとしては、内心複雑だろう。(ちなみに1万クレジットは1万円ほどの価値になる)

「でも、銀の弾丸とか必要経費込みだし、直接ハンターに持ち込まれる仕事って訳ありのヤツが多いのよね。被害者だと思っていた人が、実は黒幕だったり……ワーウルフに誘拐された子供を助け出したら、その子は両親に虐待されていて、ワーウルフが助けようとしていたり……毎年、人間不信になってやめる人も結構いるわ」

「ハンターって、そんなヤワで務まるのか？」

レイが、あきれたように言う。

「ハンターも人間なもの。それに、人間がいつも正しい訳じゃない

……私も、騙されるのは嫌よ」

「まあ、愉快的なヤツはいないな」

それもそうなんだけど。アルバイト時代に、何度か騙された時のことを思い出した。あー、やだやだ。それに、アルバイトといえは

……

「昨日のグレムリン退治の報告書を持って行った後、ハンター協会とハンターショップに行くけど、レイはどうする？」

「あー、暇だから僕も行く」

レイは、着替えに仮眠室に戻る。

「時間無いから、急いでね」

声を掛けると、私は報告書をチェックするためにパソコンを起動させた。

事務所にて（後書き）

相変わらず、話が進んでない（笑）

アルバイトと書いたグレムリン退治ですが、下請けと考えてください。

## 2回目の実地試験

15:00時。私とレイは、先日アルバイトで引き受けたグレムリン退治の報告書を届けた後、ハンター協会に来ていた。のだが、とある事情で30分も待たされていた。

「あー暇だ。暇だ。だいたい、呼び出しておいて待たせるなんて、何考えているんだ」

レイが、ソファアーにふんぞり返って言う。

「レイ。少し静かにして。言っていたでしょ。私と組むはずだったハンターが、事故で大怪我したんだから仕方ないじゃない」

しかし、私の本心を言うと、延期になんて、とんでもない。ここで延期になったら、何週間またされるか。それだけ、準備に時間がかかるのだ。

「待たせて、悪かったね」

ドアが開いて、40代半ばぐらいの男性が入ってきた。

「葉月 秋穂さんだね？」

「は、はい。よろしくお願いします」

私は、ソファアーから立ち上がり頭を下げた。

「そちらの方は？」

レイの方を向き、男性が聞いた。

「はい。助手の、レイ＝ブラッドです」

私が紹介すると、レイは「どうも」と片手を上げた。(ちよつと待たされてイライラしているのは、あなただけじゃないのよ)

「すみません、礼儀知らずで。後で、よく言って聞かせますから」とすると、男性は笑っていった。

「いや、こちらこそ、待たせてしまったね。おっと、申し遅れたが、私は、スターク＝鈴木といいます。よろしく」

「いえ、こちらこそ、よろしくお願いします。鈴木さん」

私は、もう一度、頭を下げた。

「では、早速ですが、仕事の話に入りましょうか。次の実地のターゲットは、下僕クラスのヴァンパイアです。バックアップは、ハンター会社『銀鎖社』から二人。助手は、二人まで。その経費はハンター自身が担うこと、報酬は成功報酬で、350万クレジット。必要経費込みです。詳細はこちらの資料をご覧ください」

私は、A4サイズの資料を受け取りザッと目を通す。

事件ランクB、ヴァンパイアによる殺人。その後、被害者のゾンビ化により死亡者二人、重軽傷者四人。ヴァンパイアは、逃亡。

ヴァンパイアの駆除を最優先。なお、任務遂行時の周囲への被害、人的被害は、ハンター協会が負うものとする。

つまり、責任は協会がとるから、思いっきりやってよしってことね。制限がない分やりやすいが、それだけ、危険でもある。

「駆け出しのハンターには、重くないか、この仕事」

今まで黙っていたレイが、口を開いた。

「ヴァンパイアが1体だけならいいが、他のヴァンパイアの介入があったら、手におえないぞ」

「どうします？秋穂さん。決めるのはあなたです」

鈴木さんが言う。そうなのだ、試験とはいえ仕事選ぶのは私だ。

一瞬、前回、ヴァンパイアと対峙した時のことを思いだし、体が震えた。

レイの言うこともわかる。だが、ヴァンパイアハンターが、ヴァンパイアから逃げるわけにはいかない。

「やりませう。やらせてください」

私の、このセリフで、二回目の実地試験は、ヴァンパイア退治に決まった。

## 2回目の実地試験（後書き）

すみません。しばらく放置してしてしまいました。

なにやら不連続きの秋穂ちゃん。試験は大丈夫なのかな？  
続きます。

## ハンターショップ斬

「いらつしゃいませ」

静かな店内に、店員の声が響いた。それ程広くない、ハンターショップ『斬』の壁には、売り物のナイフが展示してある。すべて、オリジナルだ。

「店長いる？」

店員に聞いたが不在だそうだ。30分程で戻るとのことだったので、待つことにした。

壁のナイフの1本を手にして見ているレイに、声を掛けた。

「ほしい物ある？」

「いや、新たに欲しい物はないが、これと同じ物を作れるか？」

そう言つて、投げナイフを取り出して見せた。店員に見せると、「多分、大丈夫だと思いますが、返事は店長が帰ってきてからでいいですか？」とのことだった。問題は無い。どのみち、店長を待っているのだ。

私はレジ横のイスに腰掛けて、店員とレイのやり取りを眺めることにした。

店員は銃を何丁か取り出し薦めているが、レイは関心なさそうだ。「やあ、いらつしゃい。ナイフ1本から、対戦車ランチャーまで、なんでもそろえて見せますよ」

店に入ってきたスキンヘッドにサングラスの男がレイに声をかける。

「店長、彼は私の助手なの」

「そうなの？秋穂ちゃん」

私が頷いたのを見て店長はレイに向き直り、白い歯を見せて笑う。

「よし、好きなものを選びな。勉強させてもらうから。それから、秋穂ちゃん、注文の品届いているよ」

そう言つて、小脇に抱えた包みを渡してくれた。包みを開けると、

中には、『グロッグ18C』が2丁出てきた。セミ・フルオート兼用のマシンピストルだ。前回の教訓を生かして、弾丸をバラ撒け、携帯性の高い銃として選んだ。射撃訓練も、ここ1週間みっちりやった。

「あとは、銀の弾丸が5箱：サービスにもう1箱つけて6箱。射撃訓練の費用を入れて、全部で150万クレジットでどう?」

「ええ、いいわよ。現金で払うわ」

バックから現金を取り出し店員に支払う。

「ああ、いいかな店長?これと同じ物を作れないか?」

レイが投げナイフを、店長に渡す。ナイフを受け取った店長は、ニカツと笑った。

「なかなかいいものだね。10本1セットでなら、40万クレジットで引き受けるよ。納期は5日」

「壁のナイフは、全部店長の作品か?」

「ああそうだ。刃から仕上げまで、すべて俺がやっている。それがどうかしたか?」

「いや、なんでもない。言い値で払うよ」

私は、店員に更に40万クレジット支払う。

「はい、前払いで。領収書お願いね」

「秋穂。自分で払う。そのくらいは持っているから」

しかし、私はレイ言葉を、無視することにした。

「経費よ。経費」

支払いを済まし、領収書を受け取ると、18時をまわっていた。

今から『リーフ』に行けば、夕食にちょうどいい時間だ。

「店長。レイのナイフお願いします」

そう言って、店を出ようとした私を、店長が呼びとめ、弾丸の入った箱をくれた。

「お守り代わりだ。試作品だけど、CZにでも装填しておくといい」

「ありがとう店長」

私は、店長の厚意を素直に受け取ることにした。

## ハンターショップ斬（後書き）

怪しげな武器屋「斬」でのヒトコマでした。

店長のモデルはシテイハンターの海坊主さんです。（笑

次回はとうとう仕事に入ります。

がんばろー（笑

対 ワーウルフ（前書き）

やっとお仕事の時間です。  
いざ、ヴァンパイア退治！

## 対 ワーウルフ

「レイ。銀鎖社のハンターさんは？」

私は、イヤホンと一体化した通信機に聞いた。

「怪我はしているが、命に別状は無い」

「レイ。隣のブロックまで後退して」

「それでは、援護ができない」

「命令！ …… 終わったら、なにか美味しいもの食べにいきましょうね」

私は、なるべく明るい声で言った。レイに助けを求めたくなる衝動を押さえ込む。

「わかった」

通信が切れる。戦闘服（外見はライダースーツに、金属製の装甲を追加した感じだ。スーツ自体は電気で伸縮する布で作られ、装者の力を倍加させるパワーアシスト機能付だ）に身を包み、2丁のグロツグ18Cを構え周囲をうかがう。

私の周囲には、4匹のワーウルフが倒れている。奇襲を受けた時に倒したやつだ。しかし、下僕クラスのヴァンパイアが、ワーウルフを従えているとは、非常に稀なケースだ。

あと、3匹…… 何処にいるの？ 耳を澄ますが、何も聞こえない。こうなったら、行動あるのみ。遮蔽物の陰から飛び出す。

10mと行かないうちにイヤホンが剥ぎ取られた。頬に鋭い痛みが走るが、無視してフルオートでグロツグをぶっ放す。手応え有り、5匹目。

突然、街灯に照らされている私の周囲がかげろ。状況を確認することなく、真横に飛ぶ。

グシャ、一瞬前まで場所に、ワーウルフの腕が刺さった。少しでも躊躇していたら串刺しになる所だった。

「喰らえ！」

グロツグが火を噴く。狙い通りに、頭部に弾丸が叩き込まれるの

を確認し、遮蔽物の陰に飛び込む。6匹目、後1匹。

グロツグから弾倉を引き抜き、予備弾倉を取り出す。ドン！轟音と共に遮蔽物にしていた壁が吹き飛ぶ。

「グッ」

首をつかまれ、吊り下げられる。左手から弾倉が落ちた。

銀色のワーウルフ！ 酸欠で視界がかすむ。

「……よくも、仲間を…… 楽には殺さんぞ」

かすんでいく視界の中で、残った力を振り絞り、グロツグをワーウルフの額に当てる。

「はっ、弾倉を抜いた銃で、何をするつもりだ？」

ゆっくりと、引き金を絞る。パン！ワーウルフの頭が爆ぜた。

「何故だ？」

「ごほっ、ごほっ、ごほっ」

肺が新鮮な空気を求める。咳き込みながら、グロツグに予備弾倉を装填して、スライドを引き薬室に初弾を送り込む。

「装填時…… ごほっ、薬室に弾丸を残すのは、基本でしょ」

私は苦しい息の下、ワーウルフにウインクして見せた。

パチ、パチ、パチ、パチ。

拍手？振り返ると黒装束の男。それに、赤い瞳。ヴァンパイア……

「勇ましい、お嬢さんだ。用があるのは私かな？」

私は、グロツグを構えなおした。

「そつよ。あなたを駆除します」

対 ワーウルフ（後書き）

今回も読んでいただきありがとうございました。

ビジュアル的には、映画とかでよく使われるベレッタのほつが、わかりやすいのですが、ひねくれモノなのでグロツグを使用です  
（笑）

今回は、レイ君の視点で話が進みます。まだ名前しか出ていない、あの御方も登場します。

## レイとアルセクト

「くそつたれ！」

作戦前に、予備弾倉を抱えた秋穂が、「予想外の事態は、いつでも起こりえるわよ。前回の教訓」等と言っていたが、現実になると厄介だ。

バックアップの俺たちと、秋穂が同時に奇襲を受けた。しかも、ベテランのはずのハンター二人が負傷したのだから始末に負えない。

「秋穂。応答してくれ」

しかし、通信端末からはノイズが聞こえるだけだ。

「チツ」

舌打ちをすると、秋穂のいるエリアに向かい走り出した。

間に合った。ビルの上から秋穂の姿が見えた。黒装束を着た男と対峙している。

ビルから飛び降りようとした時、足元にナイフが刺さった

「手出しは、無用に願えないか。あのハンターの実力を見たい」

声の方向に振り向く。そこには、ロマンスグレーの紳士が立っていた。そして、赤い瞳。その顔にも見覚えがあった。

「アルセクトか……」

「ヤツはやりすぎたのでな。始末しにきたのだが…… 先にハンターと接触したらしいな。あのハンターに任せようと思うのだが、どうかね？それとも、あのハンターが傷つくのは見ていられないかね？レイ＝ブラッド君」

アルセクトからは、俺の瞳が金色に変わるのが見えただろう。

「わざわざ、そんなことを言う為に、俺の邪魔をしたのか？」

「ふむ、あのハンターは、美月に似ているな。彼女も黄金律の身体なのかね？」

「黙れ！アルセクト、俺はお前と話している暇は無い」

アルセクトは、手のひらを上に向けて肩をすくめた。

「君が、美月の時と同じ過ちを繰り返すなら、止めるつもりは無いがね。あの程度のヴァンパイアにやられるようなら、どのみち長くはないよ。彼女の為を思うなら、一人でやらせてみてはどうかね？」

俺は、銀のナイフを抜いて、切っ先を向ける。

「黙れ！美月の事は言うな！俺は同じ過ちは起こさない！守って見せる！」

アルセクトが、憐れむような目を向ける。

「変わらぬな。だが、美月のことは、200年前のことだ……悔やんだとて、どうにもならん。それに、彼女は美月ではない。そして、ハンターだ。自分の命すら守れないようでは、話にならん。黄金律の身体ならなおさらな」

俺とアルセクトは、そのまま睨み合う。

「安心しろ。私も、美月に似た……いや、瓜二つの人間を見殺しにするのは忍びない。危ないと思ったら手を貸そう。だが、その時はハンターを辞めさせたほうがいいな」

「わかった。しばらく見守ろう、次は止めるな。今度はお前を倒してでも行く」

アルセクトが微笑を浮かべた。

## レイとアルセクト（後書き）

今回も、読んでいただきありがとうございます。

今回は、内容の割りにキーワードが出てきました。

『黄金律の身体』 『美月』

まあ、今は忘れていても別に問題ないんですけどね。このキーワードを入れるためだけに、レイ視点の話が割り込みました（笑）

さて、今回は援護を失ってなおワーウルフを撃退した秋穂。孤立無援のままヴァンパイアとの戦闘に突入します。

秋穂に残された武器は、『知恵と勇気』（笑）

では次回お会いしましょう。たぶんそんなに時間は掛からないと思います。

## 対 ヴァンパイア

「私を駆除すると？」

ヴァンパイアが鼻で笑う。

「人間が一人で？」

次の瞬間、グロッグをフルオートでぶっ放した。はずれた！さすがにワーウルフとは動きが違う。

弾倉が空になったグロッグを懐に戻し、もう1丁のグロッグを構える。残りの弾は装填されている分と、予備弾倉がひとつ。もう無駄撃ちは出来ない。私は背中を向けて走り出した。

背を向けても、いきなり殺される事はないと踏んだからだ。本来の運動能力を考えれば、ヴァンパイアから人間が逃げ切るのは不可能だ。つまり、追い詰められたら戦うしかない。だが、ヴァンパイアが逃げた人間をあっさり殺す事は無い。嬲り殺すのだ。

思惑通り、ヴァンパイアからの攻撃は無い。私はビルとビルとの通路にもぐり込む。幅は1mも無い。

そして、その先は行き止まりになっている。

「もう、終わりかね。もつと楽しませてくれないと、おもしろくないではないか」

ヴァンパイアは、余裕だ。

私は、無言でグロッグを発砲。ヴァンパイアは上空に逃れるが、急に上から何かを押し付けられるように動きが止まった。前もって、張り巡らしておいたワイヤーに引っかかったのだ。

すかさず弾倉の残りの弾丸を、ヴァンパイアの胴体に叩き込む。ヴァンパイアが地面に落ちた。

私はグロッグの弾倉を取替え、少しづつ近づくと、3m、2m、1m。ヴァンパイアは動かない。「ふう」と息を吐いた。と、次の瞬間、目の前が真っ暗になり、衝撃と共に壁に弾き飛ばされ、グロッグが手から放れた。

痛い！左腕を見ると、半ばからありえない方向に曲がっている。完全に折れている……肋骨も何本か折れたらしい、激痛に視界がかすむ。

「人間どもは、良いものを作ってくれる。防弾チョッキと言ったか」ヴァンパイアの顔に、嘲笑が浮かぶ。痛みに耐え、腰からCZ75引き抜く。ヴァンパイア頭を狙い、弾倉が空になるまで引き金を引く。

「くッ、はア、はア……」

涙で視界がかすれ、心臓が跳ねる。息をするだけで精一杯だ。銃なんて肋骨が折れた状態で撃つものじゃない。反動が激痛として響く。しかも、そんな思いをして、右腕に1発当たっただけだ。

残った武器は、レイの投げナイフが1本とヴァンパイアの足元に転がるグロッグだけだが、この激痛の中グロッグを取り返すようなアクションは不可能だ。残されたチャンスは、止めをさそうと近づいてきた時。

「人間の小娘が、私に手傷を負わせたことは、ほめてやろう。だが、これで終わりだ」

ヴァンパイアが、ゆっくりと近づいてきた。

## 対 ヴァンパイア（後書き）

今回もありがとうございます。

防弾チョッキを着たイロモノヴァンパイアに苦戦中の秋穂です。しかも、左腕と肋骨の骨折に加え銃火器をすべて失って、大ピンチ！圧倒的に不利な状態ですが逆転なるか！それでは次回お会いしましょう。

## 白い天井

ズキン、ズキンと心臓が脈打つたびに激痛がはしり、意識が飛びそうになる。気絶したら楽になるのだろうか、気絶したら目を覚ます保障はない。

勝負は1度きり、チップは自分の命…… 手札は銀のナイフが1本。それが、私に残されたすべてだった。

ガバツ！起き上がった瞬間、激痛が襲う。痛みには耐えかねベッドに倒れ込んだ。

白い天井に清潔なシート、消毒液の臭い…… 病院のベッドの上だ。

あれからどうなったのか、思いだそうとするが、まったく思い出せない。

「秋ちゃん。気がついたの」  
声が出たので、入り口を見ると秋保さんが、立っていた。

「びつくりしたんだから。目も覚まさないし」  
「秋保さん。私、どのくらい寝ていました？」

「半日ぐらいよ。もうすぐお昼よ。あとの事はレイ君に聞いたほうがいいわ。今、呼んで来るわね」

秋保さんは、病室を飛び出して行った。そんなに、急ぐ事無いのに。

私は、ため息をついて目を閉じた。

「と、溶けた?!」

その時、私があげた声は、物凄く間の抜けたものだった。

「そつ、ヴァンパイアが急に苦しみ出したと思ったら、溶けた。それはもう、ホラー映画のように」

レイは、説明を続けるが、私は半分も聞いていなかった。……溶けた。……そんな話聞いた事無い。硫酸のプールに突き落としても復活するような連中だ。

「何で?」

私の呟きに、レイが反応した。

「斬の店長に、試作品の弾丸もらっただろう。多分そのせい」

「CZに装填していたヤツね」

確か、1発だけ腕に当たったはずだ。

「店長に聞いてきたのだが、あの弾丸な。弾頭が中空になっていて、中に聖水をジェル状にしたものが詰めてあったそうだ」

「……」

本当だろうか?どっちにしても、今回も運がよかつただけらしい。

「とりあえず、斬の店長さんが命の恩人という事になるのかしら?」

「さあな。見方を変えれば、実験に使われたとも見える」

レイは、苦笑した。

「結果、命が助かったのだし、礼ぐらい言っても損はないわよ」

「なかなか、したたかだな。恩を売るつもりか?」

「そんな事無いわよ。店長さんの良心が、どう感じるかなんてわからないもの」

レイは、少しだけ困った顔をした。

「怖い奴……」

レイの呟きを私は聞き逃さなかった。

白い天井（後書き）

今回もお付き合いありがとうございました。

気が付いた方もいると思いますが、エヴァンゲリオンの第2話「見知らぬ天井」の構成パターンを踏襲してます（笑  
ということは、次回がヴァンパイア戦の決着です。  
次回もお付き合いお願いします。

## 決着

倒れたままの秋穂が、CZを連射するが、ヴァンパイアの腕に1発当たっただけだ。銀の弾丸でも、急所に当たらなければ意味が無い。

屋上から飛び出そうとしたレイの肩を、アルセクトが掴んだ。

「まだ、彼女は諦めていない」

レイがアルセクトを睨む。

「離せ。これ以上は我慢できない」

アルセクトは、あっさりレイの肩を離れた。

「まあ、約束だからな」

レイが屋上から飛び降りた。アルセクトもそれを追う。

ヴァンパイアと秋穂の間にレイ。ヴァンパイアの背後にアルセクトが降り立つ。

「邪魔をするな!!」

ヴァンパイアが吼えた。

「そうはいかなくてね。彼女をやらせる訳にはいかない」

金色の瞳をしたレイが秋穂を守るようにして立つ。

「貴様はやりすぎた。ここで始末させてもらう」

アルセクトが静かに告げる。

ヴァンパイアが笑った。

「原種と主人か。だが、戦い方によっては……」

ヴァンパイアは、右手に持ったグロツグをレイにむける。グロツ

グは秋穂のものだ。

「便利な道具は、使わせてもらわないとな……ぐっぐわわわあ!

な、なんだ?こ、小娘!き、貴様、何をした!」

ヴァンパイアの右腕が、グロツグを握ったまま、白い煙をあげてポトリと地面に落ちた。あっという間に落ちた腕が溶け、赤黒い液

体が変わる。それだけにとどまらずヴァンパイアの全身から白煙が上がる。

「ぐおおおおおおおつ、あ、熱い。身体が……俺の身体が」  
ヴァンパイアの顔が溶け崩れる。そして、赤黒い液体が地面に滴り落ちた。まるで、映画でも見ているような光景だ。3分後にはヴァンパイアは跡形もなく溶けてしまった。

「……どうということだ？」

アルセクトが呆然として、レイに訊ねた。

「さあな。心当たりがあるとしたら、CZには試作品の銀の弾丸が装填してあつたはずだ」

レイは秋穂を抱き起こしながら言った。痛みで気絶しているその右手には、投げナイフがしっかりと握られている。

「無茶をする。これで戦うつもりだったのか秋穂」

秋穂を見つめるレイの顔は優しい。

「なかなか、気の強いお嬢さんらしいな。レイ、覚えておけ。美月はもういないぞ」

「わかつている……」

アルセクトは、にやりと笑った。

「私のねぐらは昔と変わらない。気が向いたら訊ねて来い」  
「いかねえよ」

レイが返事を返した時には、アルセクトの姿は無かった。遠くからパトカーと救急車のサイレンの音が聞こえた。

決着（後書き）

今回はラストまで連続更新です。

これからもよろしく

「もらったわよ。営業許可書」

左腕を吊ったままの私は、常連が溜まっているカウンター席に座り、いつものブレンドを注文した。

マスターは「おめでとう」と言いながら、コーヒーとスコーンの乗った小皿を出してくれた。

「マスター、ありがとう」

私は上機嫌だ。営業許可書も取れたし、ヴァンパイアを倒した分だけでなく、ワーウルフの分まで報酬が出たのだ。消費した弾薬の分と私の治療費を差し引いても、ずいぶん懐が暖かい。

やっぱり、懐が暖かいと心にも余裕が出来るわね。「うふふ」と含み笑いをする私から、カウンターに座っていた常連連中が、何か危ないものを見る顔をして距離を取る。

「一体何をしているのだから……」

いつの間にか、私の真後ろに立ったレイが、あきれたように呟いた。

「きゃっ、音もなく後ろに立つのはやめてよね」

「ほい。『斬』の店長からお祝いだと」

レイは、小さな小包をくれた。早速あけてみると小さな拳銃が入っていた。

「わあー、ダブルデリンジャーだ。欲しかったんだこれ」

私の言葉を聞きながらブレンドを注文したレイは、私の手の中にあるデリンジャーに視線を向けた。

「なあ、秋穂ってガンマニア？」

「いきなり何よ」

「いや、事務所にも20丁ほどあるだろう」

「全部、携帯許可は取っているわよ」

「否定はしないわけだ」

確かに否定できないが、あつさり認めるのも、なにかくやしい。

「さあね。そのうち分かるわよ。はい」

私は、レイに銀行の通帳を渡す。

「なんだ？30万クレジット……」

「今回の給料よ。これからもよろしく。ってこと」

「ああ、こちらこそ」

私はニヤリと笑みを浮かべた。

「それでは、この支払いはレイのおごりね。マスター、スペシヤルチョコパフェ（1200クレジット）追加ね」

私は、レイの額に伝票を張り付けた。

第1話 完

これからよろしく(後書き)

ヴァンパイアハンター日誌の第1部終了。

最期まで、お付き合いありがとうございました。

この後、第2部の予告編があります。宜しければまたお付き合いをお願いします。

## 次回予告

「秋保ちゃん。怪我の具合はどう？」

マスターが訊ねてきた。

「もう大丈夫。今から依頼人に会う約束なのよ」

「警部。被害者が死亡しました」

事件のあった現場に、若い刑事が飛び込んできた。部屋の中には、まだ、男の死体が転がっている。

「被害者は二人になったか。死因は？」

「レイか……」

アルセクトが振り返る。

「お前も、ヤツを追っているのか？」

「今回は強力せぬぞ。美月の仇は……」

「それは、こっちのセリフだ」

闇の中に、女の白い肢体が浮ぶ。金系のような髪が、彼女の動きに合わせて揺れた。

「はうっ、あっ、ああっ、イイツ、お、美味しいわっ、あなた」

男の上にまたがった、女の腰が跳ねる。

「た、助け、て……くれ」

男が、途切れ途切れに言った。女の顔に笑みが浮んだ。

「だ、だめよ。あっ、あう、私を、満足させるまで許してあげない」

「あなたは、いらないわ。バイバイ」  
くびに当てられていた女の手が、すつと横に引かれた。  
喉から熱いものが込み上げてきて、視界が赤く染まる。  
喉に手を当てると、鮮血が噴出していた。

ヴァンパイアハンター日誌、第2話。

『金髪のヴァンパイア』

近日公開予定。

ヴァンパイアハンター日誌 第1部を、最後までお付き合いいただきありがとうございます。

そして物語は第2部『金髪のヴァンパイア』に続きます。次回作は、ちょっとだけ残酷描写とエロスがふくまれる予定です（笑）  
いやー、ヴァンパイアものを書くなら、適度なエロスは欠かせないでしょう（笑）

でも、全年齢対応ですよ。

そして純粋なアクションシーンも増えて、読み応えも当社比2倍の予定でお送りします。

では、次回作もお付き合いお願いします。

この物語にお付き合いしてくれたすべての方に感謝を。

# 広告募集中

小説関連広告に最適です。  
出版社や印刷会社はもちろん、  
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4287c/>

ヴァンパイアハンター日誌 新人ハンターとヴァンパイア

2009年3月24日10時21分発行